

かごしま農36景



何は無くとも

ある市町村長と懇談する機会があった。

「企業を誘致した。ゴルフ場も造った。道路の舗装も百パーセントになった。しかし、人口は依然として増えない。若者は出て行く。」と嘆く。聴きながら、失礼だが、四人の漫談グループのおはこ「何は無くとも私や背が欲しい。」を想い出した。

これほどまでに真剣に血眼で取組んでいる過疎対策だが、農村は土地や人間がくつついた生活であり社会だから、若者の都市への流出は避けがたいという指摘がある。

今日でこそ独立した家を持つ若い世帯が増えたが、それでも親、兄弟と軒を並べ、溝さらえや道普請の共同作業、豊年祭に顔を出さないわけにはいかない。更には、家の古いしきりがあり、長幼の序が生きている。こうくると、若者には耐え難いほどバカバカしく、農村に留れという方が無理なように思われる。

だが、近年鹿児島では、農村の特長である“ゆとり”や“うるおい”を求めてUターン、Jターンする人々が増えている。また農業・農村に対する評価も変ってきたようだ。農林水産省が平成5年8月に行った「農村の若い女性の実態と意識に関する調査」によると、結婚前に抱いていた予想に比べて報酬が「少なく」労働が「きつい」という声が多いものの、農作業全般としては「おもしろい」と実感する人が「つまらない」とする人の2倍。地域のつきあいに「特に問題はない」とする人が「わずらわしい」とする人の、これまた2倍を示し、生活の総合評価でも多くの女性が「よかった点が多い」と評価している。

1月末、「誇れふるさとの創造」を目標に村づくりを進めている新潟県入広瀬尊重須佐昭三さんの話を聞いた。御多分に洩れず企業誘致や温泉開発に取り組んでいるほか、「農地の放棄は村落の崩壊を意味する」と農家負担の軽減を内容とする条例を作り全村域のほ場整備を達成。また「都市並みの生活環境を」と農業集落排水事業による下水道整備も全村域で完成。これらの苦心談の中に「雪下しツアー」の企画の話。難儀なイメージしかなかった雪下しをイベントにしたら、交流の輪が広がり鹿児島からも団体が参加があったと。厄介者を活かした発想の転換がおもしろい。「つきあいはつらい」だが、「血は水より濃い」と、また、「遠くの親戚より近くの他人」というのではないか。ついでに「農業しかない」と考えるよりも「何は無くとも私のところの農業はどこにも負けない」と考えると元気が出てくる。

(1995年2月)

◇「かごしま農36景 / 発行:鹿児島県農業農村整備情報センター」より

文:門松経久

写真:村上 光明「寒干の頃」第1回かごしまフォト農美展